マスク着用常態化が児童の表情認知発達に及ぼす影響

○中山隼登[1]・宮里翔大[1,]・山村豊[1]
([1]桜美林大学)
キーワード：表情認知，マスク，児童

The effect of constantly wearing masks on children's facial recognition development

Hayato NAKAYAMA[1], Shota MIYAZATO[1] and Yutaka YAMAMURA[1]
([1]Obirin Univ.)
Key Words: facial expression recognition, mask, children

目　的

顔に示される表情や視線などの社会的情報を理解する表情認知は対人コミュニケーションにおける重要機能の一つである。新型コロナウイルス（SARS-CoV2）感染拡大予防のためにマスク着用が常態化したことによって、表情認知能力に弊害が生じる可能性が懸念される。本研究では、表情認知能力の客観的測定が可能な小学 1～2 年生の時期をコロナ禍で過ごした小学生 3～4 年生を対象に、過去 2 年程度のマスク着用による対人コミュニケーションの経験が、表情認知能力にどのような影響を及ぼすかを検討することを目的とする。

方　法

調査対象者　小学校 3～4 年生のうち、以下の検査で完全回答を得られた 179 名（男児 95 名、女児 84 名）で平均年齢 8.89±0.72 歳、3 年生は 91 名（男児 47 名、女児 44 名）で平均年齢 8.37±0.48 歳、4 年生は 88 名（男児は 48 名、女児 40 名）で平均年齢 9.43±0.49 歳であった。

調査時期・場所　神奈川県の公立小学校にて、2022 年 8 月下旬に実施した。所要時間は、全体で 45 分程度であった。

使用検査　表情認知能力を測定する検査としては株式会社トーヨーフィジカルの『子ども版表情認知検査』（小松・箱田，2012）を使用した。所要時間は約 15 分程度で、集団で実施した。

調査手続き　表情認知検査を集団で実施し、検査用紙を回収した。

結果と考察

表情認知検査全体の比較　今回の調査対象者の表情認知検査の正答数について、学年ごとにその平均と標準偏差を算出し、今回のデータと常態化する以前の「子ども版表情認知検査」の手引書で示されているデータ（小学 3 年生：平均 22.42±3.12、小学 4 年生 23.70±3.08）を比較したところ、4 年生ではマスク使用が常態化する以前より以後で得点が 1 ポイント強程度低下していた（Fig.1）。マスク使用常態化後では、3 年生と 4 年生とで大きな差はないことから、3 年生から 4 年生で生じる表情認知能力の発達が他者の表情を見られないという状況が続いたことによって抑制した可能性が考えられる。

男女別表情認知検査の比較　男性顔と女性顔それぞれに対する男児と女児の学年別平均と標準偏差を算出し、今回のデータと常態化する以前の手引書で示されているデータを比較したところ男女差はみられなかった（Fig.2）。また、女子顔に対してはマスク使用が常態化した前後でほとんど違いがなかった。一方、男子顔に対しては、男女ともにマスクの使用が常態化する前よりも後の方で得点が低下したとともに、女児ではマスク使用常態化前にあった 4 年生時における得点の上昇が常態化後には見られず、さらに男児では 3 年生よりも 4 年生の方で得点が低下していた。

以上の結果、4 年生で表情認知能力の発達がわずかであるが抑制される傾向が示された。さらに、この傾向は男女児に関係なく男子顔に顕著であった。おそらく、男児の方が女児よりも表情が硬いため、児童どうしでも豊かな表情に接する機会が少ないなどの要因が考えられる。

Fig.1 常態化前後の表情認知検査得点

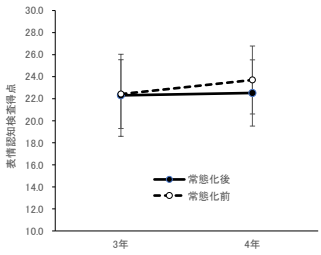
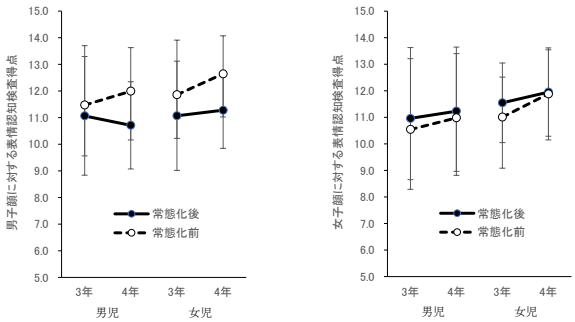


Fig.2 常態化前後における男女別基本統計量



引用文献

小松 佐穂子・箱田 裕司（2012）．子ども版表情認知検査 株式会社トーヨーフィジカル

©公益社団法人日本心理学会

インフォームド・コンセント：有